

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The effect of the L1 on the acquisition of noun-modifying structures : The overuse of "No" as 'transfer in the developmental process'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山, 悟, KOYAMA, Satoru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001898

研究ノート

連体修飾構造の習得における母語の影響について
 一過程的転移としての「の」の過剰使用一

The effect of the L1 on the acquisition of noun-modifying structures:
 The overuse of “No” as ‘transfer in the developmental process’

小山 悟

KOYAMA, Satoru

要旨

「格助詞『の』の過剰使用は中国語話者の典型的な誤用であり、母語の干渉によるものである」とする説は現在もかなり広く受け入れられているが、実際には同じ誤用が韓国語話者や英語話者の発話データにも現れており、これを直ちに母語の影響によるものであると断定することはできない。また、母語の習得研究でも、幼児が連体修飾構造を習得していく過程で「の」を過剰使用する時期があることが確認されている。本稿では「の」の過剰使用を言語習得の普遍的なメカニズムの働きによるものであると考え、学習者の母語は誤用の直接的な原因ではなく、誤用の克服を遅らせる要因のひとつであるとの立場から議論を進めていく。

キーワード：「の」の過剰使用 「の」の過少使用 対照分析仮説 習得順序 過程的転移

1. はじめに

「助詞『の』の過剰使用は中国語話者の典型的な誤用であり、母語の干渉によるものである」とする説は、現在もかなり広く受け入れられているようである¹。「中国語には日本語の格助詞『の』と非常によく似た機能をもつ『的』という介詞があり、日本語の『の』が名詞が名詞を修飾する場合にだけ使われるのに対し、中国語の『的』は形容詞や動詞が名詞を修飾する場合にも使われるため、中国語話者は母語の文法に引きずられ、形容詞や動詞の後にも余分な『の』を付けてしまうのだ」というのがその説明である（対照分析仮説）。しかし、その一方で「『の』の過剰使用は学習者の母語に関係なく生じる現象である」と主張する研究者も少なくなく（白畑1993a, 1993b; 迫田1999; 奥野2001）、そこには「言語構造上の分析を行う言語的問題と、その習得を扱う心理言語的問題の混同」（山岡1997:191）が見受けられる。そこで、本稿では「母語の影響か否か」という二者択一論的な観点からではなく、「第二言語習得における母語の役割と影響」という観点から再度この問題について検証し、互いに立場の異なる二つの見解の接点を模索する。

2. 先行研究

2.1 対照分析仮説

対照分析仮説では、誤用は母語の干渉によって生じ、母語との違いが大きいものほど習得が困難であると考えられていた。この理論をより具体的な形で提示したのがStockwell et al. (1965)

[表1：難易度階層(山岡 1997:191 より転載。「予測される誤用」は筆者が加筆)]

難易度	困難性の タイプ	L1：英語	L2：スペイン語	予測される誤用
難 ↑ ↓ 易	1. 分離	X	X Y	Xの過剰使用
	2. 新規	X	φ	Xの過剰使用
	3. 欠落	φ	X	Xの過少使用
	4. 融合	X Y	X	Yの過剰使用
	5. 一致	X	X	母語の干渉はなし

の難易度階層 (Hierarchy of Difficulty) である (表1)。

これを日本語の連体修飾構造との関係に当てはめると、中国語話者の場合、母語では品詞に関係なくただ「的」を挿入すればよかったものが、日本語では品詞によって複数の規則を使い分けねばならず、これはもっとも難易度の高い「分離」にあたると思われる。このケースでは、学習者は本来「Y」という目標言語独自の規則を適用すべきところにまで母語と同じ「X」という規則を適用してしまい、それが「X」の過剰使用 (すなわち「の」の過剰使用) という結果となって現れる。それに対し、例えば韓国語話者の場合には、表2にあるように母語が日本語と非常によく似た連体修飾構造をもつため (「一致」)、学習者は母語の文法をそのまま目標言語に当てはめればよく、したがって「の」の過剰使用は起こらないということになる。また、マレー語話者の場合には、母語に日本語の「の」に相当するマーカーがないため (「欠落」)、学習者は形容詞や動詞の後にはもちろん名詞の後にも「の」を付けることができない (「の」の過少使用もしくは欠落) ということになる。しかし、これまでに行われた調査からはこの予測とは異なる結果が報告されている。

2.2 反証(1)：第二言語の習得研究から

例えば、白畑 (1993a) は4歳1ヶ月で来日した韓国人児童を対象に、来日3ヶ月目からおよそ11ヶ月間、月2回のインタビュー調査を行い、児童の発話の中に「の」の過剰使用が観察されるかどうかを調べているが、それによると来日5ヶ月目から「の」の過剰使用が観察されるようになり、7ヶ月目から2ヶ月ほど正用と誤用が混在する期間が続いた後、9ヶ月目になってようやく誤用が消えたと報告している (表3参照)。

また、タイ語話者とマレー語話者 (いずれも成人) を対象とした別の縦断調査 (白畑1993b) では、タイ語話者、マレー語話者ともに「の」の過剰使用が観察され、その誤用は1年半後の調査終了時点まで保持されたと報告している (表4参照)。

一方、横断調査としては、迫田 (1999) が中国語、韓国語、英語の3つの言語を母語とする

[表2：中国語、韓国語、マレー語、タイ語の連体修飾構造]

中国語 ※例文は奥野（2001）より引用				
名詞＋名詞	花の色	花（花）	的（の）	顔色（色）
形容詞＋名詞	小さい犬	很小（小さい）	的（の）	犬（犬）
動詞＋名詞	走っている車	在（-ing）	跑（走る）	的（の） 車（車）
韓国語 ※例文は奥野（2001）より引用				
名詞＋名詞	花の色	꽃（花）	의（の）	색（色）
形容詞＋名詞	小さい犬	작은（小さい）		개（犬）
動詞＋名詞	走っている車	달리（走る）	고있는（-ing）	차（車）
マレー語 ※例文は白畑（1993b）より引用				
名詞＋名詞	太郎の本	buku（本）		Taro（太郎）
形容詞＋名詞	美しい花	bunga（花）		cantik（美しい）
動詞＋名詞	走っている車	kereta（車）	yang（-ing）	bergerak（走る）
タイ語 ※例文は白畑（1993b）より引用				
名詞＋名詞	父の眼鏡	wanta（眼鏡）	kong（の）	pō（父）
形容詞＋名詞	小さい犬	ma（犬）	tua（1匹）	lek（小さい）
動詞＋名詞	走っている車	rod（車）	kuklang（-ing）	wing（走る）

成人学習者60名（初級～超級）の発話データを分析しているが、それによると「の」の過剰使用はいずれのグループにおいても共通して観察されたという。また、奥野（2001）も初級から上級までの学習者22名（母語は様々）を対象に、学年の最初と最後に2度データを収集するという縦断調査と横断調査を掛け合わせた調査を行っているが、結果はやはり同じで、「の」の過剰使用は「中級の発達段階において母語に関わりなく生じる誤用であると言える」（p.193）と述べている。

これらの結果はいずれも、「の」の過剰使用が母語の影響によって生じるとは必ずしも言えないということを示唆している。

[表3：韓国人児童の連体修飾構造の習得過程（白畑1993a, p.113）]

滞在期	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
年齢	4; 4	4; 5	4; 6	4; 7	4; 8	4; 9	4; 10	4; 11	5; 0	5; 1	5; 2
名 <small>の</small> 名	-	-	7	18	35	28	29	11	59	24	56
*形 <small>の</small> 名	-	-	3	5	4	3	-	-	-	-	-
形名	-	-	-	-	6	22	12	8	16	13	26

*は「誤用形」であることを示す。年齢の「4; 4」は「4歳4ヶ月」を意味する。

[表4：タイ語話者とマレー語話者の連体修飾構造の習得過程(白畑1993b, pp.58-59)]

タイ語	回	1	2	3	4	5	6	7	8	9
*名名		1	5	4	2		2		2	
名の名		25	41	56	65	72	82	66	76	61
*形の名		4	3	5	2	5	4	1	2	2
形名		4	7	11	9	17	19	22	18	24
*動の名				3	5	4	6	5	2	3
動名				1	3	15	10	19	14	11

マレー語	回	1	2	3	4	5	6	7	8	9
*名名		12	6	2	2					
名の名		21	47	50	61	78	88	74	68	77
*形の名				12	15	21	10	6	5	5
形名			5	3	2	5	8	9	18	19
*動の名						8	10	6	8	7
動名							4	4	10	9

2.3 反証(2):母語の習得研究から

この結論を側面から裏付けているのは母語の習得研究である。というのも、もし「の」の過剰使用が本当に学習者の母語の影響によって生じるのだとすれば、今まさに日本語を母語として習得している段階の幼児の発話にはそのような誤用は生じないはずだからである。しかし、これまでの研究では(1)～(4)のような非文法的な発話が連体修飾構造の習得過程で一時的に現れることが明らかになっている。

- (1) *青いのプープー
- (2) *ちっちゃいのプープー
- (3) *怪獣になったの女の子
- (4) *うさちゃんが食べたのニンジン (Clancy 1985, p.459)

3. 誤用の原因

では、なぜ「の」の過剰使用は生じるのか。この疑問に答えるには、「の」の過剰使用を個別の現象としてではなく、言語習得のプロセスの中に位置づけて考えるという発想の転換が必要であろう。すなわち、母語や年齢といった個別的な要因によってではなく、普遍的な習得のメカニズムの働きによって誤用が生じると考えるのである。

3.1 幼児の連体修飾構造の習得順序

「普遍的な習得のメカニズムとはどのようなものか」について考える際、その手掛かりとなるのは幼児の連体修飾構造の習得順序である。これはおおよそ次のような五つの段階に分かれる。

第1段階は、幼児が二つの語彙をただ順番に並べることによって「修飾＋被修飾」の関係を表現しようとする時期である。その結果、「名詞＋名詞」²と「形容詞＋名詞」という二つの構造が産出されることになる。

(5) *姉ちゃんブーブー (*名詞_φ名詞)

(6) 赤いブーブー (形容詞_φ名詞) (Clancy 1985, p.458)

とはいえ、これは幼児が「名詞十の十名詞」という構造よりも「形容詞＋名詞」という構造の方を先に習得するということを意味するものではない。幼児が形容詞と名詞を適切に結びつけることができるのは単なる偶然に過ぎないことは、習得の第2段階で幼児が名詞と名詞の間に「の」を挿入できるようになると、それを過剰一般化し、形容詞の後にも不必要な「の」を付けてしまうことから明らかである。つまり、この第2段階では幼児は修飾語と被修飾語とを結びつける要素として「の」という格助詞があることには気付いているが、修飾語の品詞が何であるかによってそれが現れたり消えたりすることにはまだ気付いていないと考えるべきであろう。

(7) 大阪のおじいちゃん (名詞_φ名詞)

(8) *青いのブーブー (= (1)) (*形容詞_φ名詞) (Clancy 1985, p.458)

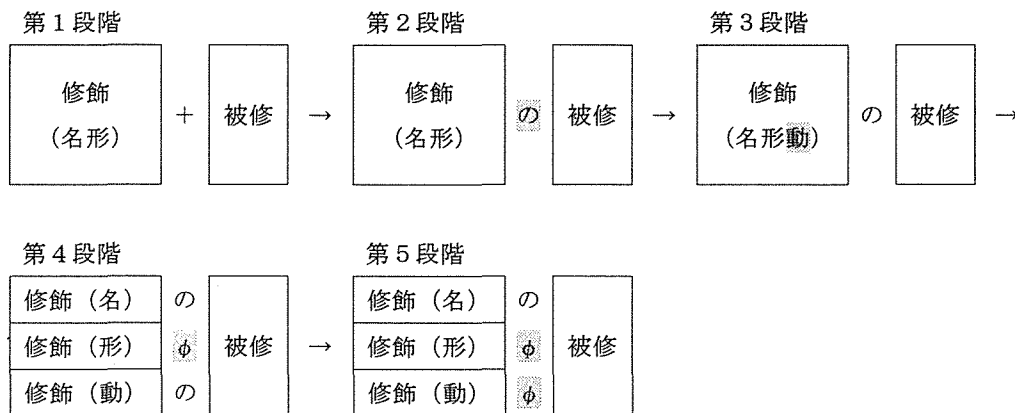
そして、第3段階に至ると、幼児は動詞と名詞の間にも不必要な「の」を挿入するようになる。

(9) *うさちゃんが食べたのニンジン (= (4)) (*動詞_φ名詞) (Clancy 1985, p.459)

しかしその後、形容詞の誤用形（「形容詞十の十名詞」）が消え（第4段階）、続いて動詞の誤用形（「動詞十の十名詞」）が消える（第5段階）ことで、連体修飾構造の習得が完了する。この習得順序をわかりやすく図式化したのが図1である³。

3.2 第二言語習得との比較(1): 児童の場合

この習得順序は日本語を第二言語として学ぶ児童のそれとよく似ている。例えば、先に紹介



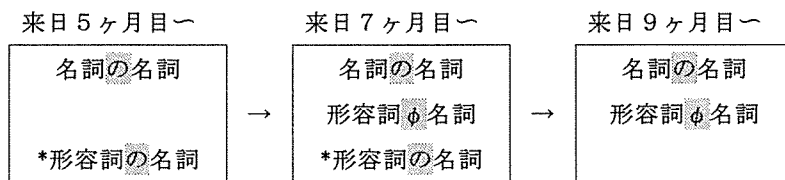
【図1：日本語を母語とする幼児の連体修飾構造の習得過程】

した白畑（1993a）の調査では、被験者となった韓国人児童の場合には、最初に名詞の正用形（「名詞十の十名詞」）と形容詞の誤用形（「*形容詞十の十名詞」）が現れ、しばらくして形容詞の正用形（「形容詞十名詞」）が現れた後、最後に誤用形が消え正用形だけが残るという習得の順序を辿ることが報告されていた（表3）。これを図式化したのが図2であるが、一旦「の」の過剰使用の状態を経た後、誤用形が消え正用形だけが残るという点では共通していると思われる。

3.3 第二言語習得との比較(2)：成人学習者の場合

もちろん児童の場合には、成人と比べると認知面でも情緒面でも幼児との違いがそれほど大きくないのは事実で、互いの習得順序が似ていたとしてもさほど不思議ではない。そこで次に、成人学習者がどのような習得の道筋を辿るのかを調べるために、同じ縦断調査である白畑（1993b）のデータ（表4）を改めて分析してみたところ、次の三つのことが明らかになった。

- (10) タイ語話者もマレー語話者も調査開始当初からかなりの正確さで名詞の正用形（「名詞十の十名詞」）を発話することができる。
- (11) 名詞に比べると形容詞の正用率が上がるのはかなり遅く、タイ語話者の場合には調査開始2ヶ月目から、マレー語話者の場合には調査開始8ヶ月目から正用形（「形容詞十名詞」）が誤用形（「*形容詞十の十名詞」）を大きく上回るようになる。
- (12) 動詞の正用率が上がるのは形容詞よりも更に遅く、タイ語話者の場合には調査開始5ヶ月目から正用形（「動詞十名詞」）が誤用形（「*動詞十の十名詞」）を大きく上回るようになるが、マレー語話者の場合には調査終了時点でも正用形と誤用形の比率はほとんど変わらない。



[図2：韓国人児童による連体修飾構造の習得順序]

これらの結果は、成人学習者が連体修飾構造を「名詞→形容詞→動詞」の順に習得していくことを示しており、これは幼児の母語習得や児童の第二言語習得と一致する。また、特にマレー語話者の場合に顕著であるが、形容詞も動詞も最初は正用形よりも誤用形の方がより多く発話されるところを見ると、学習者が「名詞十の十名詞」の構造に引きずられ、「の」の適用規則を形容詞や動詞にまで過剰一般化してしまったことが窺える。これも幼児の母語習得過程とよく似た現象である。

4. 母語の影響

4.1 過程的転移

では、学習者の母語は第二言語の習得に何の影響も与えないのであろうか。この点について検証するために、OPIによってレベル分けされた学習者の発話データを分析した迫田（1999）と奥野（2001）の研究にもう一度目を向けてみる。

二人が母語話者間の違いとして指摘しているのは以下の3点である。

- (13) 他の言語話者に比べ、中国語話者の場合には上級レベルになっても半数以上の学習者に誤用が観察される。（迫田 1999）
- (14) 中級レベルで見られなかった「の」の過剰使用が、上級レベルになって出現する学習者が中国語話者に多く見られる。（奥野 2001）
- (15) 中国語話者は、他の母語話者と比べて修飾部の品詞に関わらず、広範囲に「の」の過剰使用が見られる⁴。（奥野 2001）

いずれも中国語話者に見られる特徴を指摘したもので、要約すると、中国語話者は他の母語話者に比べて「の」を過剰使用する傾向が強く、しかもその誤用をなかなか克服することができないということになる。しかし、一方で「『の』の過剰使用は母語の影響によるものではない」としながら、そのまた一方でこのような明らかに母語の影響と思われる現象が見られるのはなぜであろうか。

この一見矛盾しているかのように見える現象を説明するには、第二言語習得における母語の影響を習得の「順序」と「速度」に分けて考える必要がある。つまり、学習者の母語は習得の「順序」には影響を与えないが、習得の「速度」には影響を与えるという説明の仕方である。これはいわゆる「過程的転移 (transfer in developmental process)」の概念で説明することができ

るであろう。「過程的転移」というのは習得のある段階で一時的に現れる母語の影響を意味するもので、具体的には「ある構造が自然な発達過程の特定の段階に入ったとき、母語の影響によってその発達段階に長くとどまり、次の新しい段階へ移行するのが遅れる」(山岡1997: 195)などの現象が挙げられる。

その根拠となるのは、Zobl (1980) による英語の否定構造の習得研究である。これまでの研究で英語の否定構造の習得には、表5に示すような四つの段階があることが明らかになっているが、Zoblによると、スペイン語母語話者の場合には他の母語話者と比べて(16)や(17)のような形式の発話をする期間が長いという。これはスペイン語には「Yo no tengo bicicleta. (=I not have a bike)」のような「否定辞+動詞」の否定構造があるためで、スペイン語話者は習得の第二段階に到達すると、母語の影響を受けてその段階に長く留まり、なかなか次の段階へと移行することができないためであると説明している。

(16) This no is chicken.

(17) The glass no will break. (Zobl 1980: p.471)

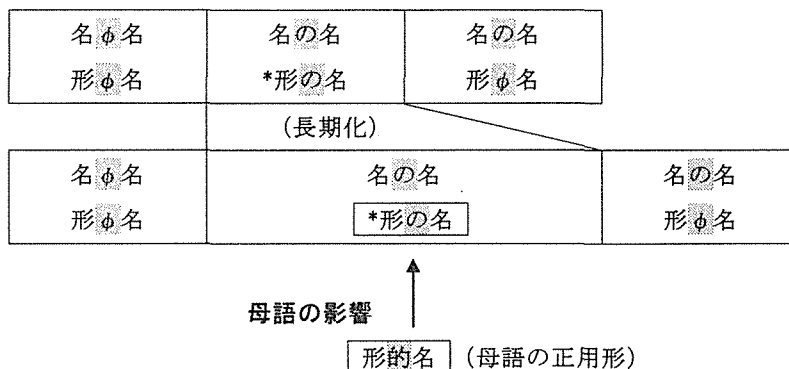
この「過程的転移」の概念を日本語の連体修飾構造の習得に当てはめると、「の」の過剰使用について次のように説明することができる。

(18) 学習者は幼児の母語習得と同じ普遍的な習得のメカニズムに沿って連体修飾構造を習得する。それゆえ、学習者が辿る習得の道筋や発話の中に現れる誤用のタイプは、その年齢や母語に関わりなく互いによく似たものとなる。「の」の過剰使用はその一例で、学習者が形容詞や動詞の後に不必要な「の」を付けてしまうのは「名詞十の十名詞」という構造を過剰一般化してしまったからであって(格助詞仮説)、母語の影響によるものではない。ただ、中国語話者の場合には日本語の誤用形が母語では正用形となるため、母語と目標言語との混同を引き起こしてしまい、誤用の克服に時間がかかってしまう。

言い換えれば、「誤用の原因は母語ではないが、誤用の克服を妨げているのは母語である」ということである。これを分かりやすく図式化したものが図3である。

[表5: 否定構造の習得順序(Larsen-Freeman and Long, 1991: p.94)]

Stage	Sample Utterance
1. External (外置否定)	No this one / No you playing here.
2. Internal (内置否定), pre-verbal (動詞前置)	Juana no / don't have job.
3. Aux. + neg. (助動詞+否定)	I can't play the guitar.
4. Analysed <i>don't</i> (分析された否定)	She doesn't drink alcohol.



[図3: 連体修飾構造の習得における母語の影響(※上段が通常の習得順序と時間経過)]

4.2 残された問題: 「の」の過少使用

連体修飾構造の習得における母語の影響について論じる際、もうひとつ問題となるのは「の」の過少使用である。中国語では、修飾名詞と被修飾名詞が全体と部分の関係にある場合(= (19))や修飾名詞が被修飾名詞の素材を表す場合(= (20))、あるいは修飾名詞が人称代名詞で被修飾名詞が親族名詞の場合(= (21))には「的」が使われないため、母語の影響によって「金指輪」のような誤用が生じると考えられている(張 2001)。

- (19) 大衣袖子 [コートの袖]
- (20) 金戒指 [金の指輪]
- (21) 你姐姐 [あなたのお姉さん] (張 2001, pp.41-42)

しかし、これが本当に中国語という母語の影響によるものなのかどうかを証明するためには、少なくとも以下の4点について検証する必要があるであろう。

- (22) 「*金指輪」や「*コート袖」のような誤用は、実際、中国語話者の発話に「顕著に」現れるのか。
- (23) 中国語では「的」を使うにも関わらず、「の」を省略してしまった誤用(例、「花的顔色」→「*花色」)は観察されないのか。
- (24) 中国語とは全く異なる連体修飾構造をもつ他言語話者の発話には、「*名詞+名詞」の誤用形(すなわち、「の」の過少使用)は現われないのか。
- (25) 「*名詞+名詞」の誤用形は第二言語習得にだけ観察される現象なのか。

「の」の過少使用が「母語の影響によるものである」と認定するためには、まず中国語話者の発話に「*金指輪」や「*コート袖」のような誤用がある程度の頻度で観察されることが絶対

条件である。稀にしか現われないのでは、それが本当に「誤用 (error)」なのか、それとも単なる「言い間違い (mistake)」にすぎないのが判別できないからである。また、それとは逆に、「*花色^{はないろ}」のように中国語では「的」を挿入するにも関わらず、日本語では「の」を省略してしまったというような誤用が、「*金指輪」や「*コート袖」と同じような頻度で現われないことも認定条件のひとつであろう。その種の誤用が高い頻度で観察されてしまったら、学習者は母語の文法とは関係なく「の」を挿入したり、省略したりしていることになるからである。さらに、「*名詞十名詞」の誤用形が英語など他言語を母語とする学習者の発話や、母語の習得過程には現われないのか、また現われるとすれば、それは「いつ」「どんな場合」かについても検証しなければならない。もし英語話者や幼児の発話にも「*名詞十名詞」の誤用形が観察されるとなれば、誤用の原因は母語ではないという可能性が高くなるからである。

この問題に関して、量的に処理されたデータに基づいて検証を行った研究は、今のところまだないようである。しかし、本論で取り上げたデータだけを見ても、以下の2点については指摘することができる。

(26) 「*名詞十名詞」の誤用形は中国語話者だけに観察されるものではない。

(27) 「*名詞十名詞」の誤用形は母語の習得過程においても観察される。

(26) については、表3と表4の白畑 (1993a,1993b) のデータを見れば明らかである。タイ語話者もマレー語話者も習得の初期の段階で (正用形と比較して決して数は多くないが) 「*名詞十名詞」の誤用形を発話しているからである。また、(27) についても、図1に示したように習得の第一段階として名詞と名詞をただ「修飾語十被修飾語」の順に並べるだけの時期があることが明らかになっている。となると、残された問題は前述の四つの認定条件の最初の二つだけである。すなわち、「『の』の過剰使用は、中国語話者の発話にどの程度の頻度で現われるのか」と「中国語では『的』を使うにも関わらず、日本語では『の』を省略してしまう誤用がどの程度観察されるのか」⁵ である。しかし、残念ながら迫田 (1999) も奥野 (2001) も「*名詞十名詞」の誤用形については分析しておらず、ここから先は次の研究課題となるが、「の」の過剰使用を「過程的転移」の結果として捉えるのであれば、「の」の過剰使用も同様に、習得の初期の段階で学習者の母語とは関係なく生じる「発達上の誤り (developmental errors)」と考えるのがよいのではないだろうか。

5. おわりに

中国語話者による「の」の過剰使用を「母語の影響によるものである」とする対照分析仮説の説明は、必ずしも間違っているとは言えない。中国語話者が他の母語話者に比べて「の」を過剰使用する傾向が強いことは、迫田 (1999) の研究でも奥野 (2001) の研究でも証明されているからである。しかし、第二言語の習得論として母語の影響を論じる際に重要なのは、その

誤用が母語の影響によるものなのかどうかを論じるのではなく、母語の影響が第二言語の習得過程において「いつ」、「どのような形で」現われるかを理論化することである。本論では、そのひとつの試みとして母語干渉の代表的な例のひとつとされている「の」の過剰使用を取り上げ、「過程的転移」の概念を導入することによって説明を行った。

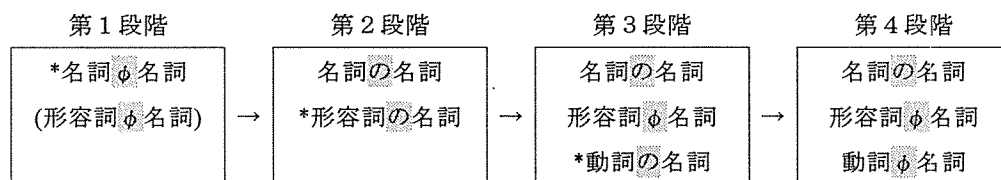
(28) 学習者は第二言語の習得過程において母語で用いられている形式と同じ形式を使用する段階に到達すると(=いつ)、その誤用をなかなか克服できず、その段階に長く留まってしまう(=どのような形で)。

というのがその結論である。もちろん、母語の影響と役割はこれだけではなく、学習者の母語は第二言語の習得過程において様々な関わり方をするようである。それゆえ、今後はひとつひとつの誤用を言語構造上の違いという観点からのみ個別に検証するのではなく、幼児の母語習得を含めた言語習得の心理的なメカニズムの観点から、より多角的に検証していくことが必要ではないだろうか。

注

- 1 それは例えば、吉川(1997: 12)や張(2001: 36)のような記述に伺える。
- 2 ただ、必ずしも全ての幼児が「名詞+名詞」という構造を産出するわけではなく、中には最初から「名詞+の+名詞」という構造を正しく用いることのできる幼児もいるという。(Clancy 1985, p.459)
- 3 白畑(1993b, p.56)の提示した習得順序の図では、全体を4段階に分け、動詞の誤用形が現れると同時に形容詞の誤用形が消えることになっているが、形容詞の誤用形と動詞の誤用形が併存する時期があるという報告もあり(Clancy 1985: 589)、この図1では白畑の第3段階を二つに分けて全体を5段階とした。

日本語を母語とする幼児の連体修飾構造の習得過程(白畑 1993b, p.56)



- 4 迫田(1999)のデータでも、ナ形容詞や動詞に不必要な「の」を付けてしまう誤りは中級レベルでは全ての母語話者グループに共通して見られるが、初級レベルや上級レベルでは中国語話者にしか見られない。
- 5 この点について、張(2001: p.43)は「あなたお姉さん」や「僕ガールフレンド」のような誤用を今のところ一度も見ただことも聞いたこともないと述べている。

参考文献

- 奥野由紀子 (2001) 「日本語学習者の『の』の過剰使用の要因に関する一考察 —縦断的な発話調査に基づいて—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』50号, 187-195.
- 迫田久美子 (1999) 「第二言語学習者による『の』の付加に関する誤用」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』327-334, 科学研究費補助金研究成果報告書.
- 白畑和彦 (1993a) 「幼児の第2言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰生成 —韓国人幼児の縦断研究—」『日本語教育』81号, 104-115, 日本語教育学会.
- 白畑和彦 (1993b) 「連体修飾構造獲得過程における化石化現象」『平成5年度日本語教育学会春季大会予稿集』55-59, 日本語教育学会.
- 張 麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク.
- 山岡俊比古 (1997) 『第2言語習得研究』桐原ユニ.
- 吉川武時 (1997) 「誤用分析。」『日本語誤用分析』2-53, 明治書院.
- Clancy, P. (1985) The acquisition of Japanese. In I. D. Slobin (ed.), *The Cross Linguistic Study of language Acquisition (Vol.1)* (pp. 373-524). Hillsdale New Jersey: Lawrence Erlbaum associates publishers.
- Larsen-Freeman, D. and Long, M. (1991) *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. London: Longman.
- Stockwel, R., J. Bowen and J. Martin (1965) *The Grammatical Structures of English and Spanish*. Chicago: University of Chicago Press.
- Zobl, H. (1980) Developmental and transfer errors: their common bases and (possibly) differential effects on subsequent learning. *TESOL Quarterly* 14, 469-479.